



筆者 近 影
(57年10月 六義園にて)

序

「かけはぎ人生」に寄せて

著者は「文武の人」である。通信省から電電公社に至る長い間、特に戦前、戦中、戦後の社会の激動の中で、常に高い目標をかゝげて努力し、電気通信事業は勿論、趣味の方でも立派な足跡を残してこられた。

渡部さんは、戦争中は南方に従軍されたが青春時代から随筆、俳句、標語をよくし、電報電話局長時代多忙な中で社内報を発行し、それに毎号必ず寄稿されていたほか、部内外の雑誌にも数多く寄稿されていた。

俳句は「馬酔木」に所属し、また電電公社の「線路マンの歌」では多くの応募者の中から最高の入選者となられたことはあまりにも有名である。

スポーツの方でも公社を退職されるまで、剣道の選手として電電関東大会に出場する他、卓球は関東通信局管内三位を獲得し、現在東京都下卓球連盟会長、八王子卓球連盟会長、八王子市体育指導委員等の要職にあり庭球も現職時代、関東大会にも屢出場している。また麻雀、ゴ

ルフ等、行くとして可ならざることのない文武両道の達人である。

著者は、私が埼玉通信部長時代、当時非常な発展局であった大井電報電話局長として、電話の大量開通を始め、立派な局の育成に努力をされ、それ以降親しくおつき合いさせて頂いているが、風貌の古武土的な反面、物事に節度を持ち、しかも柔軟な温かい心の持ち主で、多くの人から尊敬され親しまれていた。

渡部さんは、最初の勤務局で卓見を持った或る先輩の、「人は文弱に流れてもいかん、武骨一点ばかりでもいかん、すべからく文武両道の達人たるべし」との説に共鳴し、以来文武両道に精進すべく努めて来たと言っておられる。本書は、大正から昭和にかけての激動の時代に生きてこられた著者のその考え方に基ずいた人生哲学や生き方が、職員対策や陣頭語録を初め、各所に描かれており、読んで興味をそゝるばかりでなく、厳しい時代における渡部さんの「ひたむき」な生き方に、共感と感動を覚えるものが多い。

著者は、自分の人生は「かけはぎの人生」と謙遜しておられるが、こゝに書かれている内容は、私達が生きていく上に何らかのヒントを与えてくれるものと思ひ、序に代えて推奨する次第である。



目次

序	
はしがき	
南十字星の下へ（従軍雑記）	
従軍発令	11
慌しい出帆	13
人間万事さい翁が馬	23
いよいよ南十字星の下へ	25
南ボルネオ上陸	27
ボルネオ民政部の通信行政	29
タラカンへ出張	32
バンジャルマシンの思い出	33
興南報国団のこと	37
抑留から帰還まで	39

三十七年ぶりの訪問 46

陣頭語録

(電電箱根篇)・発刊に際して	59
年頭所感	60
今年は「安全、無事故」で	63
事故はなぜ起きるか	64
サービス精神は事業愛から	66
人のふり見てわがふり直せ	67
新社員を迎え二年社員に望む	68
私生活にも事故は禁物	70
若人よ大望を抱け	71
第十八回電信電話記念日を迎えて	73
サービス精神に徹するの年	75
(局内報「おおい」篇)躍進する大井	79
ヤングパワーに望む	80
夏に鍛えよ	82





ニコヨン突風	136
思い出(生い立ちのようなもの)	138
通信余話(川口松太郎氏はトンツ屋)	143
名所点景(箱根)	146
改式局三回記	148
苦情おぼえ書き	152
補償雑話	156
続補償雑話(わが姓氏の弁)	161
補償雑話(その三)	166
回顧・レクリエーション大会	171
さよなら、にっとう	175
懐古閑話	179
①筑波無線中継所水道縁起	179
②那須無線中継所道路騒動記	182
③双子山落雷騒動記	184
④箱根湯本局電話全滅障害記	186



一九七〇年よさようなら	84
祝「十七人の若侍」誕生	86
お客の身になって	88
自局を採点する	90
四恩に感謝	95
加入電話三万突破に際して	98
お別れの挨拶	101
気違い部落の電報電話(その始末記)	105
きだみのる「気違い部落の電報電話」	112
気違い部落作者訪問記	115
きだみのる「田舎電話と調査隊」	121
かけはぎ雑記	129
西本白鳥と言う絵師	131
わが局、わが職場	134
あの友・この友	131
局長さん	134



来時金

心のはたら記 (提言集)

官舎・合宿所を作れ

新しい徳育を

健康管理者の昇給

功労章の制定

提案制度へ提案

選者の権威

公社提案制度の賞金

公社よいとこ

非現業転出者の被服について

会場設営備品の常備を望む

割り切れない話

今は選手の世話役だが

レク育成は設備から

庭球につづけ、卓球連盟を結成しよう

188

191

193

194

195

196

198

199

200

201

203

204

206

208

209

新規採用と宿舍対策

線路マンの歌

剣道随想

卓球まんたら

あとがき

210

217

223

233

239

は し が き (生いたちなど)

昔流でゆけば今年六月と八月、現代流の満年令では来年の六月と八月に、私は金婚式と古稀を同年次に迎えることになる。古稀は人生七十古来稀なりと言う諺からきた節目であるが今日のように平均寿命が八十才にもなろうとしている時、七十才は別段稀ではなくなった。いずれにしても人生の一つの節目であることに変わりはない。私は若い頃から趣味か道楽か「雑文」など書くことが好きで、あちこち投稿しているうち何時の間にか相当溜ってしまった。そこで人生の節目を迎える記念にこれら「雑文」を収録し上梓することを思い立った。本来は細やかな自叙伝でも思っていたが今回はそれは間にあわない。

顧みれば大正三年東北の一寒村、貧農小作人の次男坊に生れた私は、最も不況時代の昭和五年、幸運にも仙台通講に入所した。ところが二期期の身体検査で色神障害(紅緑色盲)がばれて、担任の先生にひどく叱られ危うく退学させられるところ「しかしお前は一期期の成績が悪くない、退学させるのは可哀想だ」と言うことでそのまゝ恩赦に浴し無事卒業することが出来た。しかしこのことは少年期の私には大きなショックだった。高等科―官練と抱いた夢も希望も果無く消え失せ、卒業後の配属局も、病父の希望に添って郷里の隣村の三等局に甘んじた。

そこで夢のゴールデン計画を変更、独学による専検・予備試験・高文と無期長期計画に挑むことにした。田舎の三等局はまさに泰平ムード、一昼夜交替勤務は暇はあるが余暇を勉強に充てることは非常に克己心の要ることだった。私は「牛歩の遅々たるもよく千里を行く」の格言、どんなに遅くとも止まらずゆけば必ず到達するの信念は持っていたがその結果は三年かかって専検十二科目のうちやっと国漢地歴数の五科目を獲得するに過ぎなかった。然し高資（高等試験令七条による試験）にはあと物理・化学の二科目をとればよい。自分にも何とかできると言う自信が出て来た。

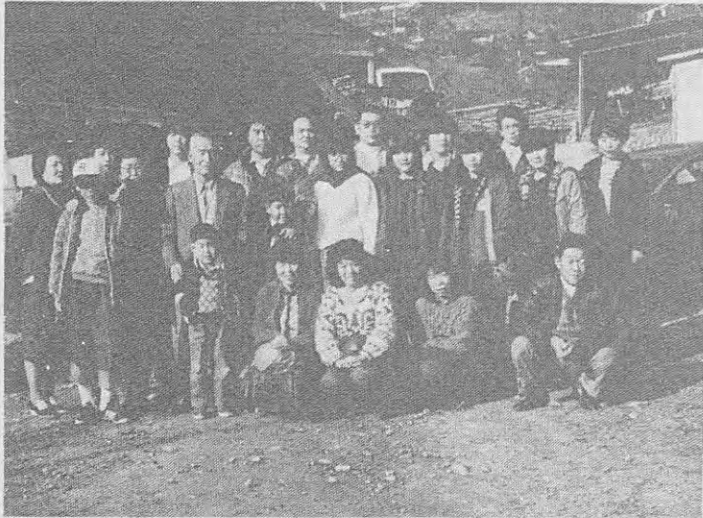
昭和五年五月病父は胆石病の手術に失敗して死んだ。初めての給料を貰った日でそれが葬式の雑費に使われた。昭和九年四月徴兵検査の結果は第一補充兵であった。亡父の叔父が八王子に居りその要望により一人娘と婿養子縁組することになり六月上京した。それから今年で五十年目に当るわけである。上京したら何とか勉強の機会もあるだろうと、当時警視庁警部だった伯父の世話で同庁電信技手を志願、試験も済んで採用迄一カ月程待機することになった。ところが数日後ハブニングが起きた。養父の親交ある八王子追分町局長から「目下町田局が大変である。局長代理以下数名賭博の現行犯で検挙され困っている、何とか手伝いに行ってくれないか」とのことである。毎日ぶら／＼も飽きているので応援することになった。これが又通信省へ舞戻ったきっかけである。何しろ賭博で挙げられる位の局だから綱紀も秩序もあったもので

ない。今から考えたらよくもあれで郵便局が無事だったものと思えない。否当時でも不思議な三等局であった。当時の町田町は人口八千、電報は一日四―五十通、交代者が来なくて宿明けに帰宅出来ないことが何度もあった。窓口の切手の金などメモで借用され切手の補充が出来ない。えらいところに入ったがとに角人がいないので脱けることが出来ない。遂々八カ月、我まんが緒が切れて八王子局長に嘆願、同局へ転用になった。それは同じ通信部内でも地獄から天国へ来た思いだった。結婚によって受験勉強計画は意外な番狂わせが起きた。尤も当然のことだがそれは翌年長女が生れ翌々年長男が生れた。まさかそんな早く……も早や焦っても仕方ない。八王子局体育会での心身鍛錬と受験勉強と二本柱で牛歩に躓打つことにした。十二年秋念願の高資に合格した。一番嬉しかった。只英語だけはまだ自信がない。とに角十七年四月十八日、初めて予備試験に挑戦した。旧貴族院の建物で午前中の英語は完敗だった。午後論文の試験中、忘れもしない東京初空襲、敵機B24が隈田川沿い低空に飛んで行く。高射砲がほんぼん打ち上げられるのだが何れも百米ぐらい後方で炸裂、全然当らなかつた。数分後日本飛行機が数機追いかけて行った。然し試験はそのまゝ、何ごともないように続けられ終わった。やはり英語の実力不足は如何ともならず、次回を期したがその年十二月海軍従軍となった。万事休す、終戦、復職、戦後の生活難にも軽うじて耐え幸にも電気通信事業に生涯を捧げることが出来た。初志貫徹成らず、長期計画も挫折に終わったが、現場機関長も箱根と大井でやらせて

頂いたし公社退職後も、日本通信建設株と日東通建株と関連事業で一貫することができた。まことに身に余る幸せと感謝している。ひるがえれば私の人生はつきはぎだらけの「かけはぎ人生」と言える。本書は九死に一生を得た従軍記録を先頭に、続いて機関長としての陣頭の言、それから過去の雑文を大ざっぱに分類したが何しろ「よろず荒物屋」式なので整然とした区分は出来ない。年代の前後も止むを得ない。いま私には一男四女の子と十二人の孫がいる。財産のない私は彼等に譲るものがないので遺産争いの心配は要らない。この「かけはぎ人生」だけはみんなに配ろうと思う、父たり祖父たりの生きざまの一端を窺い知って貰えば満足である。

昭和五十八年 盛夏

伴秋庵主 渡部繁治



わが家の元旦パーティー
(58年元旦五日市光明山荘)
一男四女十二人の孫